



ズワイガニ（日本海系群B海域）①

ズワイガニは日本海、オホーツク海、および茨城以北の太平洋沿岸に分布する。本評価群はこのうち本州日本海沿岸の新潟県以北秋田県以南に分布する群である。本系群の漁獲や資源量等は漁期年（7月～翌年6月）の数値を示す。漁期は10月～翌年5月。

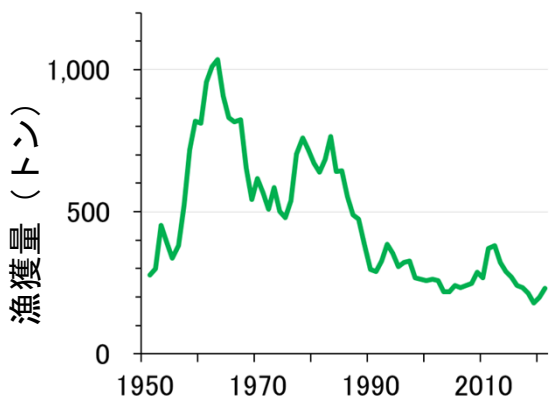


図1 分布図

秋田県～新潟県沖の陸棚斜面および縁辺部（水深200～500m）に分布。

産卵場は分布水深帯の浅い方にあり、各地に点在。

島、天然礁がある急峻な海域で、漁場は分布域に比べごく狭いと考えられる。



漁獲量（トン）
漁期年
(1998年以前は暦年の値である)

図2 漁獲量の推移

漁獲量には、1960年代に約10百トン、1980年代に約8百トンのピークがみられる。その後は減少し、1990年代以降は2百～4百トンで推移している。2021年漁期の漁獲量は229トンであった。

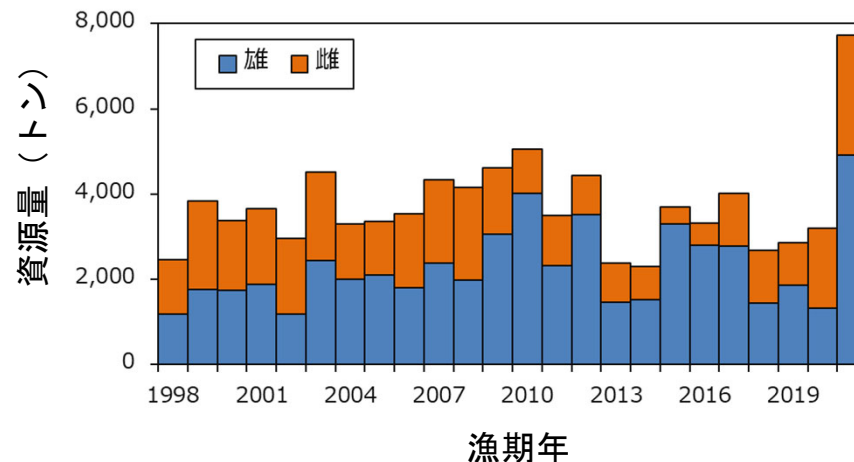


図3 資源量の推移

かご調査で推定した調査前漁期開始時点の資源量の推移を示した。雄は甲幅90 mm以上、雌は成熟個体の合計を示す。

雌雄合計の資源量は、1998年漁期以降は23百～50百トンで推移している。2010年漁期に50百トンを超えたが、その後減少し、2014年漁期は過去最低の23百トンとなった。2017～2020年漁期は27百～40百トンで推移し、2021年漁期は7,720トンであった。

ズワイガニ（日本海系群B海域）②

令和3年3月に開催された「資源管理方針に関する検討会」および「水産政策審議会」を経て、本評価群は再生産関係が不明であるため、MSYを実現する水準の漁獲圧（ F_{msy} ）を、加入量当たり親魚量が漁獲圧が0の場合の値に対し30%となる漁獲圧（ $F_{30\%SPR}$ ）により代替すると定められた。

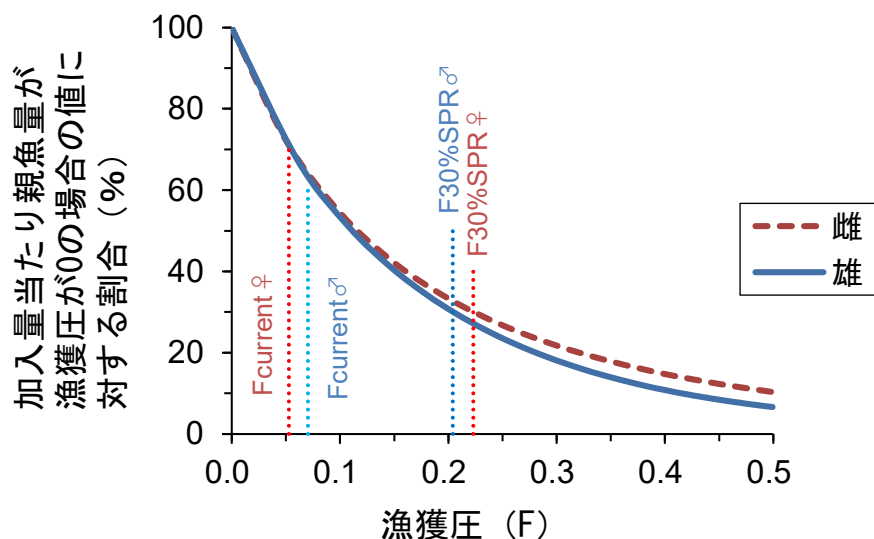


図4 MSYを実現する水準の漁獲圧（ F_{msy} ）の代替値（ $F_{30\%SPR}$ ）と現状の漁獲圧の比較

雄の現状の漁獲圧（ $F_{current}$ ：2017～2021年の平均）は0.07であり、 $F_{30\%SPR}$ は0.20であった。雌の現状の漁獲圧は0.05であり、 $F_{30\%SPR}$ は0.22であった。雌雄ともに現状の漁獲圧は、 $F_{30\%SPR}$ を下回っている。

漁獲管理規則は $F_{30\%SPR}$ に不確実性を考慮して安全を見越すための0.8を乗じた値を用いた漁獲圧一定方策とされた。

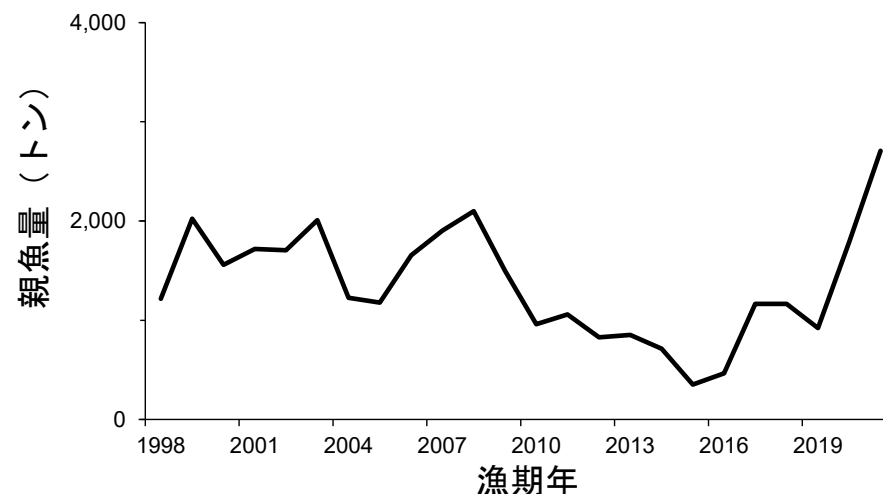


図5 親魚量の推移

かご調査に基づき推定された漁期後の雌の親魚量を示す。

親魚量は2009年漁期までは12百～21百トンで推移し、2015年漁期は過去最低の353トンとなった。2017～2020年漁期は9.2百～18百トンで推移し、2021年漁期は2,706トンであった。

目標管理基準値はMSYを実現する水準の漁獲圧（ F_{msy} ）の代替値とした $F_{30\%SPR}$ の漁獲圧により達成される親魚量と定められた。ただし、将来予測に基づく推定値が得られるまで未設定である。

ズワイガニ（日本海系群B海域）③

	親魚量 (トン)	説 明
目標管理 基準値	—*	加入量当たり親魚量が、漁獲 圧が0の場合の値に対し30% となる漁獲圧の水準とするこ とで達成される親魚量の水準
現状の値 (2021年)	2,706	かご調査に基づき推定された 雌の漁期後の資源量

* 目標管理基準値は将来予測に基づく推定値が得られるまで未設定である。

2023年の ABC (トン)	2023年の 資源量予 測値 (トン)	現状の漁獲圧 に対する比 (F/F2017- 2021)	2023年の 漁獲割合 (%)
640*	4,100*	2.96	15.6
<p>漁獲管理規則はF30%SPRに不確実性を考慮して安全を見越すための0.8を乗じた値を用いた漁獲圧一定方策とされた。 2023年漁期の資源量の予測値と漁獲管理規則(0.8F30%SPR)に基づき算出された2023年漁期のABCは640トンである。</p> <p>* ABCは十トン未満を、資源量は百トン未満をそれぞれ四捨五入した値である。</p>			